

サッカーにおける状況判断能力の向上を促す指導法の開発

ーゴール前での攻撃側選手の視点に着目してー

横山 恭仁 （ 鹿児島大学 ）

1. 目的

サッカーにおいて状況判断能力は、ボールコントロールやパスなどのテクニックとともにスキルを構成する重要な要素であるとされている。しかし、状況判断能力の指導に関して、指導者の経験的な立場からの工夫や学習者の自発的、偶発的な学習に委ねられているという事態が数多く生起している。そこで、本研究では、状況判断能力の異なる対象における状況判断の過程の比較・分析及び、状況判断能力の違いと予期図式との関係の比較・分析から、状況判断能力の向上を促す指導法を開発することを目的とした。

2. 研究方法

- 1) K 大学サッカー部員のうち、攻撃の中核を担うポジションのレギュラー選手 2 名（どちらも MF）、非レギュラー選手 2 名（FW, MF）を分析の対象とした。
- 2) ゴール前での 4 対 3 のアウトナンバーゲームを行わせ、その様子をゴール裏、攻撃側背後、被験者の額、コート上空の 4 つの視点から撮影した。その後、それらの映像を用いて被験者の状況判断の過程について尋ねる非構造化インタビューを行った。なお、インタビュアーは、同一人物が担当した。
- 3) 分析は、被験者がボール関与時と非関与時に「いつ」、「何を」、「どのように」みているかそれぞれの回数を測定し、比較した。また、被験者がボールを受けてから離すまでの時間とタッチ回数を測定し、比較した。さらに、予期図式（個人技能、競技歴、戦術理解度）とゲームでのパフォーマンスを比較し、状況判断能力との関係性を考察した。

3. 結果と考察

- 1) ボール関与時：ゲーム状況を「如何に早く、広く認知できているか」について、顕著な違いがみられた。すなわち、より良い状況判断を行うためには、ボールを受ける前により広い範囲のゲーム状況を認知することが重要であると考えられた。
- 2) ボール非関与時：ゲーム状況を「如何に広く、頻繁に認知できているか」に顕著な違いがみられた。すなわち、より良い状況判断を行うためには、常に首を振って広い範囲のゲーム状況を認知し続けることが重要であると考えられた。
- 3) ボール保持時間及びタッチ回数：レギュラー選手は、保持時間、タッチ回数ともに少ない傾向がみられた。すなわち、ボール保持者になる前の段階で、如何にゲーム状況を認知できているかの違いに起因するものと考えられた。
- 4) 予期図式：技能テストと戦術テストの結果、ゲームでのパフォーマンスの比較・分析から、状況判断能力が低い被験者ほど、デュアルタスクが求められるゲーム状況下において、運動スキル及び認知スキルのどちらか、もしくは両方に起因する判断の誤りが起こりやすい傾向のあることが示唆された。

4. 結論

上記の結果から、状況判断能力の向上を促す指導には、フィールドにおいて、ボール非関与時に、広範囲を頻繁に見ることを中心的な課題としたスモールサイドゲームが有効であると考えられた。

そこで、それらの課題解決を促す指導法として、以下の課題ゲーム（3 対 1、3 + フリーマン対 2、4 対 4 の 4 ゴール、5 対 5）が作成された。